

畜産課解説

濃厚飼料(とくに蛋白質飼料)の購入上の注意

技 師 堤 兼 利

—畜産経営の成果は飼料給与の 適、不適によってきまる—

畜産経営において、その生産費目中の最大を占めるものは飼料費であり、その中でも特に、濃厚飼料費の占める割合は極めて大であります。いいかえれば家畜を飼って、より高い収益をあげるためには、飼料をいかに上手に与えるかということになります。

1、最近の動き

最近における家畜の飼養動向、即ち養鶏、養豚、酪農など、特に濃厚飼料の給与比率の高い家畜の伸びが著しい現状においては、一層この流通飼料対策は重要であります。

近年、経営の合理化に伴い、省力管理ということが大きく取りあげられて来ていますが、濃厚飼料の給与についても、従来の「ぬか」および「雑穀」を中心とした自家配合から、労力のはぶける配(混)合飼料への依存度が極めて高くなり、畜産経営における流通飼料のウエイトは、ますますたかまって来ております。(昭和39年度における全国の飼料需給状況を調べてみますと、濃厚飼料必要総量1,160万トンのうち、流通(購入)飼料850万トン(濃厚飼料の約75%)で、このうち約600万トン(流通飼料の70%。養鶏用のみでは95%)が配(混)合飼料によるものと推計される。)

ところが昨年暮れから今年はじめにかけて原料、船運賃、人件費の高騰により(39年度の飼料需給計画によれば、原料形態では国内流通飼料消費総量の約48%が輸入飼料によるものとされているが、輸入飼料の国内価格について38年4月と同年12月を比較すると、トン当たり、とうもろこし約1,000円、ふすま280円、魚粉では実に3,100円の値上がりをみせている)、配合飼料の販売価格がかなり値上がりし(岡山県農村物価賃金調査によれば、38年3月期、成鶏用20kg当り693円、乳牛用30kg当り922円、

39年3月期では成鶏用742円、乳牛用955円と、それぞれ49円、33円値上がりしている。)一方における畜産生産物価格との不均衡(岡山県農村物価賃金調査によれば、10kg当り生産者販売価格は、昭和38年度上半期の平均、飲用生乳337円、鶏卵1,811円が、39年上半期平均ではそれぞれ344円、1,646円と乳価は僅かに値上がりしているが、鶏卵は実に165円の大巾な値下がりをしている。)により、せっかく向上している畜産経営農家の生産意欲が阻害されつつあることは、まことに憂慮すべき事態といわなければなりません。

このような配合肥料の値上がり、および多頭飼育、さらには企業的大規模経営の傾向などにより、特に大規模養鶏家の一部には、飼料費の節減をはかるため、市販配合飼料に「ぬか」「ふすま」類を配合し、絶対量の増加をはかったり、さらには「ぬか」「ふすま」「雑穀」などに魚粉、骨粉などの蛋白質飼料を混合する自家配合へ復活傾向もみうけられてきているようであります。

2、濃厚飼料の蛋白質含有量

このようなことから、飼料の蛋白質含有率の低い、いわゆる低蛋白飼料による飼育(乳牛などでは、生理上、低蛋白、高カロリーの給与が好ましいともいわれているが、一般的にいえば生産量の低下を招く場合が多い)が行われたり、蛋白質含有成分のはっきりしない不合理、不経済な飼料給与が行われるおそれが生じてくるわけであります。

流通飼料の急速な増加に伴い、これの品質改善の問題も大きく取りあげられて来ていますが、国で登録されて飼料以外のものについては、必ずしも蛋白質等の含有成分が義務づけられていないため、成分も明示されずに販売されている飼料もみうけられます。通論から考えると、濃厚飼料は蛋白質含有率の高い飼料ほど高価です(魚粉はふすまの2倍以上)、

岡山畜産便り 1964.09

自家配合の場合、魚粉などの蛋白質飼料の品質の良否、給与の適、不適が畜産経営に及ぼす影響はかなり大きく、さらに家畜の生理上にも大なる意義を持つわけですから、濃厚飼料のなかでも、特に蛋白質飼料の購入、給与については留意することが必要であります。

—魚粉、肉骨粉などの蛋白質飼料は成分のはっきりしたのを選びましょう—

1、登録飼料 ㊟印飼料を選ぼう

前記のような考え方にに基づき、岡山県では、つとめて登録飼料の流通を促進させるよう指導するとともに、登録されていない飼料についても、少なくとも蛋白の含有量を明示して販売するよう指導していましたが、岡山県魚粉製造協同組合では39年八月以降、法的規制をうけない蛋白質飼料についても、つとめて蛋白質含有量を明示することとし、さらに品質保証の ㊟印をつけて販売するよう申し合わせ

ていますので、蛋白質飼料は、このような成分のはっきり示されたものを選んでいただきたいものです。

なお最近、国内産魚資源の絶対量および価格上の問題から魚粉に準じた動物性蛋白質混合飼料（魚粉、骨粉、肉粉等混合）とか、動植物性蛋白質混合飼料（魚粉、骨粉等に大豆かすなど混入）の流通が増加していますが、一概に魚粉におとるものと判断せず、蛋白含有成分、価格などを充分検討して名称のみに、とらわれることなく合理的な飼料給与をしてもらいたいものです。（畜産経営上、また家畜の生理上からも蛋白質飼料は、すべて魚粉でなければならぬことではない。例えば、鶏、1日の必要飼料（約110g）の蛋白質必要量は約16%といわれているが、このうち10%を動物性蛋白、残り6%程度は植物性蛋白質でも可とされている。）

—む す び—

ともかく、畜産経営をよりよくするためには、飼料の効率利用によい影響を与える能力ある品種、個体、環境等の選定に留意することは勿論ですが、生産目標に適応した合理的な飼料給与こそ最も肝要でありましょう。

そして単に、1袋いくらというような評価ではなく、1袋に入っている「有効な栄養素」を充分吟味して購入、給与すべきであり、このことをすべての畜産農家念頭において、畜産経営の基本としてもらいたいものであります。